

【宋紀四】 起重光協洽，盡旃蒙大淵獻，凡五年。

■宋、●魏、▲燕、統国訳漢文大成經子史部第 7 卷 232p

太祖文皇帝上之下元嘉八年（辛未，431年）

▲春，正月，壬午（1日）朔，燕は大赦す，改元して大興とす。（7-232p）

■檀道濟等は滑台救援 丙申（15日），檀道濟等は清水より滑台を救い，魏の叔孫建、長孫道生は之を拒む。丁酉（16日），道濟は壽張に至り，魏の安平公の乙旃いつせん（魏の獻帝は叔父の裔に乙旃氏を与える）眷けんに遇い，道濟は寧朔將軍の王仲德、驍騎將軍の段宏を帥いて奮撃し，之を大破す。轉戦して高梁亭（山東省濟寧道壽張県、現・濟寧市梁山県）に至り，魏の濟州（魏明帝は泰常八年碣磧に濟州を置く）刺史の悉煩庫結を斬る。

【夏は西秦を滅ぼす】

夏 西秦 夏が西秦を撃破、乞伏氏滅ぶ 夏主は秦將の姚獻を撃ち，之を敗る。遂に其の叔父の北平公の韋伐を遣わして衆一萬を帥いて南安を攻めしめる。城中は大いに饑え，人は相い食す。秦の侍中の征虜將軍の出連輔政，侍中の右衛將軍の乞伏延祚，吏部尚書の乞伏跋跋は，城を逾えて夏に奔る。秦王の暮末は蹙を窮め，櫬しん（棺を載せて隨える。決死で罪は死に當たるの意志表示）を輿にないて出でて降り，（7-233p）並せて沮渠興國（前卷六年に秦の擒となる）は上邽に送る。秦の太子の司直の焦楷は廣寧に奔り，泣いて其の父の遺に謂って曰く、

「大人は國の寵靈を荷ない，藩鎮の重任に居る。今本朝は顛覆し，豈に見衆を率いて大義を唱えて以て寇の仇を殄くさざるを得るや！」

遺は曰く、

「今主上は已に賊庭に陷ちる，吾は死を愛みて而して義を忘れるに非ず，顧みるに大兵を以て之を追うは，是れ趣かに其の命を絶つ也。王族之賢者を選び，奉じて以て主と為し而して之を伐つに如かず，庶こいねがわくは濟う有らん也。」

楷は乃ち壇を築いて衆に誓い，二旬之間，赴く者は萬餘人。會々遺は病にて卒し，楷は獨り事を擧げる能わず，亡げて河西に奔る。

■二月，戊午（7日），尚書右僕射の江夷を以て湘州刺史と為す。

【宋の檀道濟の善戦】

■檀道濟は食盡き苦戦、滑台おちる 檀道濟等は進みて濟上に至り，二十餘日間，前後に魏と三十餘戦，道濟は多く捷つ。軍は歷城に至り，叔孫建等は輕騎を縦ちて其の前後を邀り，穀草を焚燒す。道濟の軍は食乏しく，進む能わず。是に由り安頡、司馬楚之等は力を専らにして滑台を攻めるを得たり，魏主は復た楚兵將軍の王慧龍をして之を助け使む。朱修之は堅く守ること數か月，糧は盡き，士卒と鼠を熏して之を食う。辛酉（10日），魏は滑台に克ち，修之及び東郡（漢魏以来白馬に治す、滑台の地）太守の申謨を執り，萬餘人を虜獲す。謨は，鍾（95 卷晉の成帝咸和九年にあり）の之曾孫也。

●癸酉（22日），魏主は平城に還り，大いに饗し，廟に告げ，將帥及び百官は皆な賞（柔然・夏・宋を伐つの賞）を受け，戰士は覆（統は復）十年を賜う。

● **〔魏の南部の大水害の惨状〕**是に於いて魏の南の鄙に大水あり、民は多く餓死す。尚書令の劉瓘は魏主に言つて曰く、

「頃より邊寇は内に侵し、戎車は屢々駕す。天は聖明を賛け、所在は克殄（自発的に後退する意思）す。方難は既に平らぎ、皆な優錫（僧の杖）を蒙る。而して郡國之民は、征討せずと雖も、農桑に服勤し、以て軍國に供し、實に經世之大本にして、府庫之資する所なり。今山より以東は、遍く水害に遭いて、應に哀矜（哀憐）を加える、以て覆育（天地が万物をおおい育てる）を弘めるべし。」

魏主は之に従い、境内の一歳の租賦を復す。

■ **〔檀道濟は餘米を覆して魏兵を欺く〕**檀道濟等は食盡き、歷城より引いて還る。軍士の魏に亡げて降る者有り、具に之を告げる。魏人は之を迫い、衆は恟懼し、將に潰えんとする。道濟は夜篝火（数える木の串）を唱えて沙を量り、餘す所の少米を以て其の上を覆う。旦に及び、魏軍は之を見て、道濟の資糧に餘り有りと謂い、以て降者は妄と為し而して之を斬る。時に道濟の兵は少なく、魏兵は甚だ盛んにして、騎士は四もに合う。道濟は軍士に命じて皆な甲を被らせ、己は白服して輿に乗り、兵を引いて徐ろに出る。魏人は以て伏兵有ると為し、敢えて逼らず、稍稍引いて退き、道濟は軍を全うして而して返る。

■青州（東陽城に治す）刺史の蕭思話は道濟の南に歸るを聞き、鎮を委てて險を保たんと欲し、濟南太守の蕭承之は固く諫めるも、従わず。丁丑（26日）、思話は鎮を棄てて平昌（山東省遼東道安邱県、現・濰坊市安丘市）に奔（続は犇）る。參軍の劉振之は下邳に戍し、之を聞き、亦た城を委てて走る。（7-234p）魏軍は竟に至らず、而して東陽の積聚は已に百姓の焚く所と為る。思話は坐して征（続は徴）せられ、尚方に系がる。

▲燕王は夫人の慕容氏を立てて王后と為す。

●（三月）庚戌（30日）、魏の安頡等は平城に還る。魏主は朱修之が節を守るを嘉して、侍中を拜し（続には無し）、宗女を以て妻す。

■ **〔南北の緊張〕**初め、帝之到彦之（道豫、彭城武原出身）を遣わす也、之を戒めて曰く、

「若し北國の兵動かば、其の未だ至らざるに先だち、逕ちに前みて河に入れ。若し其の動かざれば、彭城に留まりて進む勿かれ。」

安頡の宋の俘を得るに及び、魏主は始めて其の言を聞く。公卿に謂つて曰く、

「卿が輩は前に我が崔浩の計（前卷前年にあり）を用いるを謬まりと為すを謂い、驚き怖れて固く諫める。常勝之家は、始めは皆な自ら人に逾えたりと謂えども、歸終（時勢の究極）に至りては、乃ち及ぶ能わず。」

司馬楚之は上疏し、以て

「諸方已に平らぐ」

と為し、大舉して宋を伐つを請い、魏主は兵は久しく勞するを以て、許さず。楚之を徴（続は徴）して散騎常侍と為し、王慧龍を以て滎陽太守と為す。

■ **〔魏の慧龍の暗殺計画〕**慧龍は郡に在ること十年、農戰並びて修まり、大いに聲績は著わし、歸附する者は萬餘家あり。帝は反間を魏に縦ちて、云う

「慧龍は自ら功は高く位は下きを以て、宋人を引いて入寇せしめ、因りて司馬楚之（潁川に屯す）を執りて以て叛せんと欲す。」

魏主は之を聞き、慧龍に璽書を賜つて曰く、

「劉義隆は將軍を畏れること虎の如し、相い中害（中傷）せんと欲し、朕は自ら之を知る。風塵之言は、想うに意に介するに足らず。」

帝は復た刺客の呂玄伯を遣わして、之を刺さしめんと欲して曰く、

「慧龍の首を得れば、二百戸男に封じ、絹千匹を賞す。」

玄伯は詐りて降人と為り、人を屏けて論ずる所有らんを求める。慧龍は之を疑い、人をして其の懷を探ら
せめ、尺刀を得る。玄伯は叩頭して死を請い、慧龍は曰く、

「各々其の主の為にする耳。」

と之を釋す。左右は諫めて曰く、

「宋人は謀を為すこと未だ已まず、玄伯を殺さざれば、以て將來を制す無し。」

慧龍は曰く、

「死生に命有り、彼は亦た安んぞ能く我を害すや！我は仁義を以て扞蔽^{かんぺい}（防ぐ）を為す、又た何をか憂うる
乎！」

遂に之を捨す。

●夏五月，庚寅（11日），魏主は雲中に如く。

■六月，乙丑（16日），大赦す。

【夏の滅亡】

夏主は乞伏暮末及び其の宗族五百人を殺す。

夏主の逃亡と吐谷渾の邀撃、夏の滅亡 夏主は魏人之逼るを畏れ、秦民（得たる乞伏の民）十餘萬口を擁
し、治城より河を濟り、河西王の蒙遜^{わん}を撃つて而して其の地を奪わんと欲す。吐谷渾王の慕瑰^{むゐ}は益州刺史
の慕利延、寧州刺史の拾虔^{しきけん}を遣わして騎三萬を帥い、其の半は濟るに乗じて、之を邀撃し、夏主の定^{てい}を執
りて以て歸り、沮渠興國^{きこく}は創を被りて而して死す。拾虔^{しきけん}は、樹洛干^{じゆらくかん}（晉の安帝義熙13年に卒す）之子也。（赫連氏
は三代二十六年。夏王の定は北魏に押されて西秦を滅ぼし、さらに北涼を奪わんとし吐谷渾に滅ぼされた）

●魏と柔然の修交 魏之邊吏は柔然の（巡）邏者二十餘人を獲り、魏主は衣服を賜つて而して之を遣わ
し、柔然は感悅す。閏月（元嘉曆七月），乙未（16日），（7-235p）柔然の敕連可汗は使いを遣わして魏
を詣で、魏主は厚く之に禮す。

●魏は宋に婚を求め、決せず 魏主は散騎侍郎の周紹を遣わして來聘し、且つ昏を求める。帝は依違（ど
ちらとも決せず）して之に答える。

義恭の長史の劉湛 荊州刺史の江夏王の義恭は、年は寢^{ようや}く長じ、政事を専らにせんと欲し、長史の
劉湛^{つね}は毎に之を裁抑し、遂に湛と隙（宋の制では幼主が州に臨むに長史を以てする）有り。帝の心は湛を重んじ、人
をして義恭を詰讓せ使め、且つ之と和解せしむ。是の時、王華、王曇首^{とんしゅ}は皆な卒す、領軍將軍の殷景仁は
素より湛と善く、帝に白すに時賢（時の賢者）の零落するを以てし、湛を征（統は徴）して太子の詹事と為し、
給事中を加え、共に政事に參ぜしむ。雍州刺史の張邵を以て湛に代わらしめ撫軍長史、南蠻校尉と為す。
之れ頃^{しばらく}して、邵（永嘉五年に雍州刺史となる）は雍州に有るとき私に營みて畜聚して、賊は二百四十五萬に滿
つに坐して、廷尉に下され、死に當るべし。左衛將軍の謝述は上表し、陳ず、

「邵は先朝の舊勳（武帝が桓玄を討つや、張邵は父張敞に白して忠款を表獻し、また劉毅に附かず）なり、宜しく優貸を蒙
るべし。」

帝は手ずから詔して酬納し、邵の官を免じ、爵土を削る。述は其の子の綜に謂つて曰く、

「主上は邵の夙誠^{あわれ}を矜み、特に曲恕（思いやり）を加え、吾が言う所は謬會（偶然に一致）し、故に特に酬納
せ見れる耳。若し此の跡宣佈（宣伝広報）すれば、則ち主恩を侵奪すると為り、之れ不可の大なる者也。」

綜をして前に對して之を焚か使む。帝は後に邵に謂って曰く、

「卿之免かるるを獲たるは、謝述は力有る焉。」

●秋、七月（元嘉曆八月）、己酉（1日）、魏主は河西に如く。

●八月（元嘉曆九月）、乙酉（7日）、河西王の蒙遜は子の安周を遣わして入りて魏に待せしむ。

●〔吐谷渾王の慕琬は赫連定を魏に送還〕吐谷渾王の慕琬は侍郎の謝太寧を遣わして魏に奉表し、赫連定を送るを請う。己丑（11日）、魏は慕琬を以て大將軍と為し、西秦王に封じる。

■左僕射の臨川王の義慶は固く解職を求める。甲辰（26日）、義慶を以て中書令と為し、丹陽尹は故の如し。

【北魏の蒙遜調略と人材登用】

●〔崔浩と道生の重用〕九月（元嘉曆十月）、癸丑（6日）、魏主は宮に還る。庚申（13日）、太尉の長孫嵩に柱國大將軍（初めての称号）を加える。左光祿大夫の崔浩を以て司徒と為し、征西大將軍の長孫道生を司空と為す。道生の性は清儉にして、一熊皮の鄣泥（泥よけ）は、數十年易えず。魏主は歌工をして群臣を歷頌（賞賛）せしめ、曰く、

「智は崔浩の如く、廉は道生の若し。」

●〔蒙遜を西域全体の王とする〕魏主は使者を選んで河西を詣らしめんと欲し、崔浩は尚書の李順を薦め、乃ち順を以て太常と為す。河西王の蒙遜を拜して侍中、都督涼州、西域、羌、戎諸軍事、太傅、行征西大將軍、涼州牧、涼王と為し、武威、張掖、敦煌、酒泉、西海、金城、西平七郡の王とする。冊に曰く、
「盛衰存亡は、魏と與に升降す。北は窮發（極北の不毛の地）を盡くし、南は庸〔山昏〕（庸は魏興上庸の地、〔山昏〕は〔山民〕に同じで〔山民〕山）を極めて、西は崑（統は〔山崑〕）嶺（崑崙山）を被り、（7-236p）東は河曲（朔方の黄河の曲）に至り、王は實に之を征し、以て皇室を夾輔す。將相、群卿、百官を置き、製を承けて假授し、天子の旌旗を建て、出入の警蹕は、漢の初めの諸侯王の故事の如くすべし。」

●〔魏主の人材登用〕壬申（25日）、魏主は詔して曰く、

「今二寇（夏・西秦?柔然?）は摧殄（消滅）し、將に武を偃（休止）せ文を修め、廢職を理め、逸民を擧げんとす。范陽の盧玄、博陵の崔綽、趙郡の李靈、河間の邢穎、勃海の高允、廣平の游雅、太原の張偉等は、皆な賢俊之胄、州（統の周は間違いと）邦の冠冕たり。《易》（中孚の九二の爻辭）に曰く『我は好爵有り、吾は爾と與に之を縻る。』玄之比の如きの者は、盡く州郡に敕して禮を以て發遣せしめん。」

遂に玄等及び州郡の遣わして至る所の者數百人を征（統は徴）し、差次して叙して用いる。崔綽は母の老いたるを以て固辭す。玄等は皆な中書博士に拜す。玄は、謚（盧謚は永嘉の後に石氏の間に転々として、冉閔の敗れるにて死す）之曾孫。靈は、順之從父兄也。

●玄の舅の崔浩は、玄と言う毎に、輒ち歎じて曰く、

「子真（盧玄の字）に對すれば我が懷古之情をして更に深から使む。」

浩は大いに流品を整え、明かに姓族を辨ぜんと欲す。玄は之を止めて曰く、

「夫れ製を創り事を立てるは、各々其の時有り。此れを為すを楽しむ者、詎んぞ幾人有るや！宜しく三思を加えるべし。」

浩は従わず、是に由りて罪を衆に得る。

●〔魏の律令更定〕初め、魏の昭成帝（什翼犍の諡）は始めて法令を製す、

「反逆者は族（一族絶滅）せらる。其の餘の死に当たる者は金、馬を入れて罪を贖うを聽す。人を殺す者は死家に馬牛、葬具を與えて以て之を平らかにするを聽す。官物を盜めば、一に五を備（賠償）わしむ。私物は、一に十を備わしむ。」

四部大人は共に王庭に坐して辭訟を決し、系訊連逮（連帶責任）之苦無く、境内は之に安んず。太祖（道武帝、拓跋珪）は中原に入り、前代の律令は峻密なるを患い、三公郎の王德に命じて刪定（110 卷安帝隆安二年）せしめ、務めて簡易を崇ぶ。季年（110 卷安帝隆安四年）に疾を被むるや、刑罰は濫酷なり。太宗（明元帝、拓跋嗣）は之を承け、吏文は亦た深し。冬、十月（元嘉曆十月閏月）、戊寅（1 日）、世祖は崔浩に命じて律令を更定せしめ、五歳、四歳の刑を除き、一年の刑を増す。巫蠱（呪い師）の者は、殺羊（夏に羊の壮健なるをいう）を負い、犬を抱かしめて諸を淵に沉（沈）める。初めて官階の九品の者をして官爵を以て刑を除くを得令む。婦人は刑に当たり而して孕むものは、産後百日にして乃ち決す。闕（宮城）左に登聞鼓（投書箱・目安箱、鼓を叩く）を懸け、以て冤（濡れ衣）人を達せしむ。

●魏主は漠南に如き、十一月、丙辰（10 日）、北部敕勒の莫弗（高車の酋長）の庫若干は所部の數萬騎を帥い、鹿の數百萬頭を驅り、魏主の行在に詣る。魏主は大いに獵して以て從官に賜る。十二月、丁丑（1 日）、宮に還る。

北涼是の歲、涼王は改元して義和とする。

■林邑王の范陽の邁は九德（現・ベトナム北部）を寇し、交州の兵は撃ちて之を卻（續は却）く。（7-237p）

太祖文皇帝上之下元嘉九年（壬申、432年）

●春、正月、丙午（1 日）、魏主は保太后（保母）の竇氏を尊びて皇太后と為し、貴人の赫連氏を立てて皇后と為し、子の晃を皇太子と為す。大赦し、改元して延和とす。（保母を皇太后は前例無し）

▲燕王は慕容后之子の王仁を立てて太子と為す。

■三月、庚戌、衛將軍の王弘は位を進めて太保とし、中書監を加えられる。丁巳（6 日）、征南大將軍の檀道濟は位を司空に進められて、還りて尋陽に鎮す。（歴城→建康→尋陽）

●[夏の赫連定誅殺と吐谷渾王の慕瓌] 壬申（28 日）、吐谷渾王の慕瓌は赫連定を魏に送り、魏人は之を殺す。慕瓌は上表して曰く、

「臣は僭逆を俘擒（捕虜）し、捷ちを王府に獻じ、爵秩は崇しと雖も而して土は廓を増さず（領土は増えない）、車旗は既に飾り而して財は周賞せられず、願はくは鑒察を垂れん。」

魏主は其の議を下す。公卿は以て為す、

「慕瓌の致す所唯だ定に而して已む、塞外之民は皆な己が有と為し、而も貪求して厭く無し、許す可からざる也。」

魏主は乃ち詔して曰く、

「西秦王の得る所の金城、枹罕、隴西之地を、朕は即ち之を與え、乃ち是れ土を裂くなり、何ぞ復た廓を須いん。西秦は款至らば、綿絹は使いの疏數に隨いて、時に臨みて増益せん、一賜に而して止まるに非らざる也。」

是れより慕瓌は貢使の魏に至る者は少々簡となる。魏の方士の祁纖は奏して、

「代を改めて萬年と為し、代の尹を萬年の尹と為し、代の令を以て萬年の令と為せ。」

崔浩は曰く、

「昔太祖は天に應じて命を受け、代、魏を兼ねて稱し以て殷商にのつと法れり。(帝嚳は亳に都し、子契は封を商に受け、契より湯まで八度遷都す。湯は始め亳に都し、先王の居に従いこれを亳殷という、故に殷商を兼ね稱す)國家は徳を積めば、當に年を享けることは萬億なるべし、名を假りて以て益と為すを待たざる也。織こ之聞く所は、皆な正義に非ず、宜しく舊號に復すべし。」

魏主は之に従う。

■ 〔文昭公の王弘卒す〕 夏，五月，壬申（29日），華容の文昭公の王弘は卒す。弘は明敏にして思致有り、而るに輕率にして威儀少なく、性は偏隘へんあい（狭い）にして、人を折辱するを好み、人は此くを以て之を少なりとする。貴顯なりと雖も、財利を營まず。卒するに及び、家は餘業無し。帝は之を聞き、特に錢百萬、米千斛を賜る。

● 魏主は南郊に兵を治め、燕を伐たんと謀る。

■ 帝は（使者の）趙道生を遣わして魏に聘さしむ。

■ 六月，戊寅（5日），司徒、南徐州刺史の彭城の王義康を改めて揚州刺史を領さしむ。（王弘卒に連動）

■ 詔して青州を分けて冀州を置き、歷城に治す。

■ 吐谷渾王の慕瑰は其の司馬の趙叔を遣わして入貢し、且つ來たりて捷（赫連定に勝つ）を告げる。

● 〔魏主は燕を伐つ〕 庚寅（17日），魏主は燕を伐つ。太子の晃に命じて尚書事を錄せしむ、時に晃は才わずかに五歲。又た左僕射の安原、建寧王の崇等を遣わして漠南に屯せしめ以て柔然に備える。

■ 辛卯（18日），魏主は散騎常侍の鄧穎を遣わして來聘せしむ。（7-238p）

■ 〔慕瑰に西域鎮撫を期待〕 乙未（22日），吐谷渾王の慕瑰を以て都督西秦、河、沙三州諸軍事、征西大將軍、西秦、河二州刺史と為し、進爵して隴西王とし、且つ慕瑰に命じて悉く南方の將士の先に夏に没する者（劉義真が敗れた時に没した者）を歸さしめ、百五十餘人を得る。

■ 又た北秦州刺史の楊難當に征西將軍を加える。難當は兄の子の保宗を以て鎮將軍とし、宕昌（甘肅省蘭山道岷県、現・定西市岷県、武都地域）に鎮す。其の子を以て秦州刺史と為し、上邽を守らしむ。保宗は難當を襲わんと謀り、事洩れ、難當は之を囚える。

■ 〔荊州の重要性〕 壬寅（29日），江夏王の義恭を以て都督南兖等六州諸軍事、開府儀同三司、南兖州刺史と為し、臨川王の義慶を都督荊、雍等七州諸軍事、荊州刺史と為し、竟陵王の義宣を中書監と為し、衡陽王の義秀を南徐州刺史と為す。初め、高祖は荊州は上流之重きに居り、土地は廣遠にして、資實兵甲は朝廷之半なかばに居るを以て、故に遺詔し諸子をして之に居ら令む。上は義慶が宗室の令美にして、且つ武烈王（臨川王道規の諡）が社稷に大功有るを以て、故に特に之を用いる。

【魏は北燕の和龍を攻め、樂浪帶方まで占領】

● 〔魏主は和龍到達〕 秋，七月，己未（17日），魏主は濡水（塞外より遼西の令支・肥如・海陽を通り黄海に注ぐ）に至る。庚申（14日），安東將軍の奚斤を遣わして幽州の民及び密雲（京兆密雲県、現・北京直轄市密雲区、長城あり）の丁零萬餘人を發して、攻具を運び、南道に出で、和龍に會せしむ。魏主は遼西に至り、燕王は其の侍御史の崔聘を遣わして牛酒を奉じて師を犒ねがわしむ。己巳（27日），魏主は和龍に至る。

■ 庚午（28日），領軍將軍の殷景仁を以て尚書僕射と為し、太子の詹事の劉湛を領軍將軍と為す。

■ 〔益州刺史の劉道濟の失政と飛龍進攻、蜀大混乱〕 益州刺史の劉道濟は、粹之弟也、長史の費謙、別駕

の張熙等を信任し、聚斂して利を興こし、政を傷つけ民を害し、官治を立て、民の鼓鑄を禁じ而して鐵器を貴賣し、商賈は業を失い、吁嗟（くさ）は路に滿つ。流民の許穆之は、姓名を變じて司馬飛龍と稱し、自ら晉室の近親と雲（続は云）い、往きて氐王の楊難當に依る。難當は民之怨（うらみ）に因りて、飛龍に資するに兵を以てし、益州に侵擾せ使む。飛龍は蜀人を招き合わせ、千餘人を得、巴興（四川省嘉陵道蓬溪県、現・四川省遂寧市蓬溪県）の令を攻め殺し、陰平（四川省西川道廣漢県、現・徳陽市広漢市）太守を逐（お）う。道濟は軍を遣わして撃ちて之を斬らしむ。道濟は五城の人の帛氏奴、梁顯を以て參軍督護と為さんと欲し、費謙は固く執りて與えず。氐奴等は郷人の趙廣と與に縣人を構扇（扇動）し、

「司馬殿下は猶ほ陽泉（四川省西川道縣竹県、現・綿竹市）の山中に在り」

と詐言し、衆を聚めて數千人を得、引いて廣漢に向かう。道濟の參軍の程展は治中の李抗之に會し、五百人を將して之を撃ち、皆な敗死す。巴西人の詔（続は無し）唐頻は衆を聚めて之に應じ、趙廣等は涪城に進攻し、之を陷す。是に於いて涪陵、江陽、遂寧の諸郡守は皆な城を棄てて走り、蜀土の僞、舊（僞置の民と土民）は俱に反す。

▲燕の石城（前漢には右北平に屬し、燕は石城郡を置く、遼西と漁陽の間）太守の李崇等の十郡は魏に降る。魏主は其の民三萬を發して圍暫（いざん）を穿ちしめ以て和龍を守る。崇は、續（100 卷晉の穆帝升平三年の見える）之子也。

▲[北魏は樂浪帶方まで占領] 八月，燕王は數萬人をして出で戦わしめ、魏の昌黎公の丘等は、(7-239p) 之を撃破し、死者は萬餘人。燕の尚書の高紹は萬餘家を帥いて羌胡固を保つ。

●辛巳（9 日）、魏主は紹を攻め、之を斬る。平東將軍の賀多羅は帶方（郡）を攻め（之により北燕は高句麗の領土をほぼ占めていたことが判明）、撫軍大將軍の永昌王の健は建德（熱可特別区域凌源県付近、現・遼寧省朝陽市凌源県）を攻め、驃騎大將軍の樂平王の丕は冀陽（朝陽市）を攻め、皆な之を抜く。九月，乙卯（14 日）、魏主は兵を引いて西に還り、營丘、成周、遼東、樂浪、帶方、玄菟六郡の民三萬家を幽州に徙す。

▲燕の尚書の郭淵は燕王に勧め、

「款を送りて女を魏に獻じ、附庸と為らんことを乞うべし。」

燕王は曰く、

「鬻（きん）（兆し、血塗る）を負うことは前に在り、忿（い）りを結びて已に深く、降附して死を取るは、志を守りて更に圖るに如かざる也。」

▲[燕は宋に救援要請] 魏主之和龍を圍む也、宿衛之士は多く戰陳に在りて、行宮の人は少なし。雲中の鎮將の朱修之は南人と與に魏主を襲い殺し、因りて和龍に入り、海に浮かびて南に歸らんと謀る。以て冠軍將軍の毛修之に告げ、毛修之は從わず、乃ち止む。既に而して事は洩れ、朱修之は逃げて燕に奔る。魏人は數々燕を伐ち、燕王は修之を遣わして南に歸りて救いを求めしむ。修之は海に泛（うか）びて東萊に至り、遂に建康に還り、黃門侍郎に拜す。

■[蜀の程道養は王となる] 趙廣等は成都に進攻し、劉道濟は城に嬰（よ）りて自ら守る。賊衆は頓聚するに日久しく、司馬飛龍を見ず、散り去らんと欲す。廣は懼れ、三千人及び羽儀（鴻羽根の儀裝備）を將いて陽泉寺に詣り、詐りて

「飛龍を迎える」

と雲う。至りて則ち道人の枹罕（現・甘肅省臨夏回族自治州）の程道養に謂って曰く、

「汝は但だ自らは是れ飛龍と言え、則ち坐して富貴を享けん。不らずんば則ち斷頭せん！」

道養は惶怖して許諾す。廣は乃ち道養を推して蜀王、車騎大將軍、益、梁二州牧と為し、改元して泰始と

し、百官を備え置く。道養の弟の道助を以て驃騎將軍、長沙王と為し、涪城に鎮せしむ。趙廣、帛氏奴、梁顯及び其の黨の張尋、嚴遐は皆な將軍と為り、道養を奉じて成都に還り、衆は十餘萬に至り、四面より城を圍み、人をして道濟に謂って曰わしめて、

「但だ費謙、張熙を送り來たらば、我輩は自ら解いて去らん。」

道濟は中兵參軍の裴方明、任浪之を遣わして各々千餘人を將して出で戦わしめ、皆な敗れて還る。

●冬、十一月、乙巳（4日）、魏主は平城に還る。

■〔甄法崇を益州刺史〕壬子（11日）、少府中山の甄法崇を以て益州刺史（劉道濟の交代）と為す。

▲〔燕の王崇は遼西で魏に降る〕初め、燕王の嫡妃の王氏は、長樂公の崇を生み、崇は兄弟に於いて最長と為る。即位に及び、慕容氏を立てて王后と為し、王氏は立つを得ず、又た崇を黜^{しりぞ}けて、肥如（直隸省津海道盧龍県、燕の幽州の治、遼西、現・河北省秦皇島市盧竜県）に鎮せしむ。崇の母の弟の廣平公の朗、樂陵公の邈は相い謂って曰く、

「今國家は將に亡^{ほろ}びんとし、人は愚智と無く皆な之を知る。王は復た慕容后の譖りを受けて、吾が兄弟は死するに日無き矣！」

乃ち相い與に亡^にげて遼西に奔り、崇を説いて魏に降らしめ、崇は之に従う。會々魏主は給事郎（北史は給事中とす）の王德をして崇を招かしめ、十二月、己丑（19日）、崇は邈をして魏に如かしめて、郡を擧げて降るを請う。燕王は之を聞き、其の將の封羽をして崇を遼西に圍ましむ。（7-240p）

●〔魏の人材登用〕魏主は諸名士之未だ仕えざる者を征して、州郡は多く逼りて之を遣わす。魏主は之を聞き、下詔して守宰に令して禮を以て申論（重ねて論ず）し、其の進退に任せ、逼りて遣わすを得る^な母からしむ。

■初め、帝は少子の紹を以て廬陵の孝獻王の嗣と為し、江夏王の義恭の子の郎を以て營陽王の嗣と為す。庚寅（20日）、紹を封じて廬陵王と為し、郎を南豐縣王と為す。

■〔蜀の楊孟子の乱〕裴方明等は復た出でて程道養の營を撃ち、之を破り、其の積聚を焚く。賊黨の江陽（四川省永寧道瀘県、現・瀘州市瀘県）の楊孟子は千餘人を將して城南に屯し、參軍の梁俊之は南樓を統べ、書を投じて孟子を説諭し、邀えて（孟子をして）入城して劉道濟に見みえしめ、道濟は版（続は板）じて主簿と為し、期を剋して賊を討たんとす。趙廣は其の謀を知り、孟子は懼れ、所領を將いて晉原（四川省西川道崇慶県、現・成都市崇州市）に奔り、晉原太守の文仲興は之と與に同じく拒み守る。趙廣は帛氏奴を遣わして晉原を攻め、之を破り、仲興、孟子は皆な死す。裴方明は復た出でて賊を撃ち、屢々戦いて、之を破り、賊は遂に大いに潰ゆ。程道養は衆を収めて七千人を得、廣漠に還り、趙廣は別に五千餘人を將して涪城に還る。

■〔蜀・包圍下で食尽く〕是より先、張熙は道濟を説いて倉穀を糶^う（売り米）らしめ、故に九月末より城を圍まれて十二月に至り、糧儲は俱に盡きる。方明は二千人を將して城を出でて食を求め、賊に敗れる所と為り、單馬にして獨り還り、賊衆は復た大いに集まる。方明は夜縋^{すが}りて而して上り、道濟は為に食を設け、涕泣して食する能わず。道濟は曰く、

「卿は大丈夫に非ずや、小敗は何の苦なるや！賊勢は既に衰え、台兵は至るに垂々^{なんなん}として、但だ卿をして還ら令め、何をか賊を憂えるや！」

即ち左右を減じて以て之に配す。賊は城外に於いて言を揚げ、云う

「方明は已に死す」

城中は大いに恐れる。道濟は夜炬火^{つゐ}を列ね、方明を出して以て衆に示し、衆は乃ち安ず。道濟は悉く財物

を北射堂に出だし、方明をして人を募ら令む。時に城中は或るいは道濟は已に死すを傳え、應ずる者有る莫し。梁俊(續は携)之は道濟を説いて左右の給使三十餘人を遣わして外に出でしめ、且つ之に告げて曰く、「吾が病は小しく損す、各々家に歸りて休息するを聽^{ゆる}す。」給使は既に出で、城中は乃ち安んじ、應募する者は日に千餘人有り。

■【晉陵公主と弘微】初め、晉の謝混は晉陵公主(晉の孝武帝の女)に尚(皇帝の娘の嬪)す。混は死し(106 卷晉の安帝義熙八年に見える)、詔して公主と謝氏は婚を絶つ。公主は悉く混の家事を以て混の從子の弘微に委ねる。混は仍^{じようせい}世の宰輔(宰相)にして、僮僕は千人、唯だ二女有り、年は數歳、弘微は之が為に生業を紀理(經紀整理)し、一錢尺帛も文簿(記録)有り。九年而して高祖は即位し、公主は號を降して東鄉君とし、謝氏に還るを聽す。門に入れば、室宇(底)倉廩は、平日と異ならず、田疇は墾闢し、舊に加える有り。東鄉君は歎じて曰く、

「僕射(謝混)は平生此の子を重んじ、人を知ると謂う可きか。僕射は亡^{ほろ}びずと為す矣！」親舊の見る者は之れが為に流涕す。是の歳、東鄉君は卒し、公私に鹹(續は咸)な謂う

「貲財は宜しく二女に歸し、田宅、僮役は應に弘微に屬すべし。」

弘微は一つも取る所無く、(7-241p)自ら私祿を以て東鄉君を葬す。

■【謝混の女の夫の殷睿の樗蒲の論理】混の女の夫の殷睿は樗蒲を好み、弘微が財物を取らざるを聞き、乃ち其の妻の妹及び伯母、兩姑之分を奪い以て戲責(博打の債務)を還す。内人は皆な弘微之讓に化し、一に争う所無し。或るは之を譏^{そし}りて曰く、

「謝氏の累世の財産は、殷君の一朝の戲責に充つ。理之允^{ゆる}さざること、此くよりは大と為るは莫し。卿は視て而して言わざるは、譬^{たとえ}ば江海に物を棄てて以て廉(清廉)と為す耳。設使清名を立てるとも而して家内をして不足せ令むれば、亦た吾の取らざる所也。」

弘微は曰く、

「親戚の財を争うは、鄙之甚だしきと為る。今内人すら尚ほ能く言う無し、豈に之を導いて争わ令む可けん乎！多き分けて少なきに共(供)せば、乏しき有るに至らず、身死して之後、豈に復た關^{かん}せ見れんや也！」

【北魏は北涼を攻めず、蒙遜との緊張】

北涼●秃髮保周は涼より魏に奔り、魏は保周を封じて張掖公と為す。

北涼●【魏の李順と涼王の蒙遜】魏の李順は復た使いを奉じて涼に至る。涼王の蒙遜は中兵校郎の楊定歸を遣わして順に謂って曰わしむ、

「年衰え疾多く、腰髀は不隨にして、拜伏に堪えず。三五日に消息は小さく差^いゆるに比べば、當に相い見えるべし」

順は曰く、

「王之老疾は、朝廷の知る所なり。豈に自ら安んじ、詔使を見ざるを得んや！」

明くる日、蒙遜は順を延^ひき入りて庭中に至り、蒙遜は箕坐(両足を伸ばして箕の如し)して幾(續は几)に隱^よりて、動き起つ之狀無し。順は正色して大言して曰く、

「謂^{おも}わざりき此の叟の無禮は乃ち此に至るや！今覆亡を憂えず而して敢えて天地を陵侮し、魂魄^{こんぱく}逝けり矣、何を^も用ってか之を見るや！」

節を握り將に出でんとす。涼王は定歸をして追いて之を止め、曰はしむ、

「太常（宗廟礼儀のことを掌る役）は既に雅より衰疾を恕せり、傳え聞くに朝廷に拜せざる之詔有りと、是を以て敢て自ら安んずる耳。」

順は曰く、

「齊の桓公は諸侯を九合し、天下を一匡し、周の天子は胙^{ひもろぎ}を賜い、命じて下り拜す無からしむ、桓公は猶ほ敢えて臣の禮を失わず、下りて拜し登りて受けたり。今王は功高しと雖も、未だ齊の桓の如きならず。朝廷は相い崇^{しゅうちよう}重すと雖も、未だ拜せざる之詔有らず。而して遽^{にわか}に自ら偃蹇^{えんけん}（驕りて姿勢正しからず）し、此れは豈に社稷之福なる邪！」

蒙遜は乃ち起ち、詔を拜して授す。

●「魏主は李順と蒙遜を論ず」使いして還り、魏主は涼の事を以て問い。順は曰く、

「蒙遜は河右を控制すること三十年（晉の安帝隆安五年に段業を殺して立つ）を逾え、艱難を経涉し、粗^{ほぼ}機變を識り、荒裔（子孫）を綏集（安んじ集める）して、群下は畏服す。厥^その孫謀^{のこ}を貽す能わずと雖も、猶ほ以て其の一世を終わるに足らん。然れども禮者^はの徳之輿、敬者^はの身之^{もとい}基也。蒙遜は禮無く、敬まわず、臣を以て之を觀るに、復た年ならず（すぐに死す）矣。」

魏主は曰く、

「易世之後、（7-242p）何の時か當に滅ばんや？」

順は曰く、

「蒙遜の諸子は、臣は略して之を見るに、皆な庸才也。聞く如くならば敦煌太守の牧犍^{ほぼ}は、器性は粗立ち、蒙遜を繼ぐ者は、必ず此の人也。然るに父に於いて之に比せば、皆な及ばずと雲（続は云）う。此く殆ど天之聖明を資^{たす}ける所以^{ゆえん}也。」

魏主は曰く、

「朕は方に東方に事（燕の攻略）有らんとし、未だ西を略するに暇あらず。卿の言う所の如くならば、數年之外に過ぎず、晩しと為さざる也。」

●「蒙遜は魏の曇無讖を殺す」初め、罽^{けい}（うおあみ）賓（カシミール地方）の沙門（僧侶）の曇無讖（法樂、385年-433年）は、自ら雲わく、

「能く鬼をして病を治せ使め、且つ秘術有り。」

涼王の蒙遜は甚だ之を重しとし、之に謂う

「聖人なり」

諸女及び子婦は皆な往きて術を受ける。魏主は之を聞き、李順をして往きて之を征せしむ。蒙遜は留めて遣らず、仍^{なほ}つて之を殺す。魏主は是に由り涼を怒る。蒙遜は荒淫猜虐にして、群下は之に苦しむ。

太祖文皇帝上之下元嘉十年（癸酉、433年）

●春、正月、乙卯（15日）、魏主は永昌王の健を遣わして諸軍を督して遼西（馮崇の燕に包圍される）を救わしむ。

■己未（19日）、大赦す。

●「長安の范の善政と安寧」丙寅（26日）、魏は樂安王の范（続は範）を以て都督秦、雍等五州諸軍事、衛大將軍、開府儀同三司、長安鎮都大將と為す。魏主は范の年少きを以て、更に舊德を選んで平西將軍の崔徽、征北大將軍の雁門の張黎を之の副と為し、共に長安に鎮せしむ。徽は、宏之弟也。范は廉恭にして

寛惠、微は務めて大體に敦く、黎は清約にして公平、政刑は簡易、徭は軽く賦に薄く、關中は遂に安んず。

● 〔馮崇を遼西王とす〕 二月，庚午（1日），魏主は馮崇を以て都督幽、平、東夷諸軍事、車騎大將軍、幽、平二州牧と為し、遼西王に封じ、其の國の尚書事を録せしめ、遼西十郡に食し、製を承けて尚書、刺史、征虜已下の官を假授せしむ。（假授についての制度）

●魏の平涼の休屠の征西將軍の金崖、羌の涇州（魏は涇州を安定郡に置き、臨涇城に治す）刺史の狄子玉と安定の鎮將の延普は權を爭い、崖、子玉は舉兵して普を攻め、克たず、退きて胡空谷を保つ。魏主は虎牢鎮の大將の陸俟を以て安定鎮大將と為し、崖等を撃たしめ、皆な之を擒とする。

● 〔陸俟と郎孤と高車〕 魏主は陸俟を征して散騎常侍と為し、出でて懷荒鎮（高車を降しておく六鎮）の大將と為し、未だ期（統は替）歳あらずして、高車の諸莫弗（莫弗は靺鞨16部の姓）は俟が嚴急にして恩無きを訟え、復た前の鎮將の郎孤を請う。魏主は俟を征して還らしめ、孤を以て之に代える。俟は既に至り、帝に言つて曰く、

「期年を過ぎずして、郎孤は必ず敗れ、高車は必ず叛さん。」

帝は怒り、之を切責し、建業公を以て第に歸ら使む。明くる年、諸莫弗は果たしては郎孤を殺して而して叛す。帝は大いに驚き、立ちどころに俟を召いて之に問つて曰く、

「卿は何を以て其の然るを知る也？」

俟は曰く、(7-243p)

「高車は上下之禮を知らず、故に臣は威を以て之に臨み、法を以て之を制し、漸を以て訓導し、分限を知らしめんと欲す。而るに諸莫弗は臣が為す所を惡み、臣が恩無きを訟えて、孤之美を稱す。臣は罪を以て去り、孤は鎮に還るを獲、其の稱の譽を悦び、益々名聲を収め、寬恕を専ら用いて之を待つ。禮無き之人は、驕慢を生じ易く、期（統は替）年を過ぎず、復た上下無く、孤の堪えざる所、必ず將に復た法を以て之を裁かんとする。此くの如く、則ち衆心は怨懟し、必ず禍亂を生ず矣。」

帝は笑いて曰く、

「卿の身は短しと雖も、思慮は何んぞ長き也！」

即日復た以て散騎常侍と為す。

●■壬午（13日），魏主は河西に如き、兼散騎常侍の宋宣を遣わして來聘せしめ、且つ太子の晃の為に求婚す。帝は依違して之に答える。

■ 〔劉道濟は卒し、程道養は大敗す〕 劉道濟は卒し、梁俊之、裴方明等は密かに其の屍（統は尸）を齋後に埋め、詐りて道濟の教命と為し以て簽（統は籤）疏に答え、其の母、妻と雖も亦た知らざる也。程道養は毀金橋に於いて天に壇に登り天を郊り、方明は三千人を將して出でて之を撃ち、道養等は大敗し、退きて廣漠を保つ。

■荊州刺史の臨川王の義慶は巴東太守の周籍之を以て巴西等五郡の諸軍事を督し、二千人を將して成都を救わしむ。

■三月，亡人（亡命者）の司馬天助は魏に降り、自ら晉の會稽の世子の元顯之子と稱す。魏人は以て青、徐二州刺史、東海公と為す。

●壬子（13日），魏主は宮に還る。

■趙廣等は廣漠より郛（四川省西川道郫県、現・成都市郫都区・都心）に至り、營を連らねて百數。周籍之と裴方明等は兵を合わせて郛を攻め、之に克ち、進みて廣等を廣漠に撃ち、廣等は走りて涪及び五城に還る。■夏，

四月，戊寅（10日），始めて劉道濟の喪を發す。

■帝は梁、南秦二州刺史の甄法護の刑政治まらず、氐、羌之和を失うと聞き、乃ち徒中より蕭思話を起こして梁、南秦二州刺史と為す。法護は、法崇之兄也。

北涼〔涼王の蒙遜は卒し牧犍立つ〕涼王の蒙遜は病甚しく、國人は共に議し、世子の菩提の幼弱を以て、菩提之兄の敦煌太守の牧犍を立てて世子と為し、中外都督、大將軍を加え、尚書事を録せしむ。蒙遜は卒し、諡して武宣王と曰い、廟號は太祖とす。牧犍は即ち河西王の位につき、大赦し、改元して永和とし、子の封壇を立てて世子と為し、撫軍大將軍を加え、尚書事を録せしめ、遣使して魏に命を請う。牧犍は聰穎にして好學、和雅にして度量有り、故に國人之を立つ。

●是より先、魏主は李順を遣わして武宣王の女を迎えて夫人と為す。卒するに會して、牧犍は先王の遺意を稱し、左丞の宋繇を遣わして其の妹の興平公主を魏に送り、拜して右昭儀とす。

●魏主は李順に謂って曰く、

「卿は蒙遜の死を言い、今則ち驗となる矣>又た牧犍の立つを言い、何をか其の妙なる哉！朕が涼州に克つは、亦た當に遠からず。」

是に於いて絹千匹、廐馬一乘を賜り、(7-243p)進號して安西將軍とし、寵待は彌々厚く、政事は鉅（続は巨）細と無く、皆な之と參議す。

■順を遣わして牧犍を都督涼沙河三州、西域羌戎諸軍事、車騎將軍、開府儀同三司、涼州刺史、河西王に拜し、宋繇を以て河西王の右相と為す。牧犍は功無く賞を受けるを以て、順を留め、上表して安、平の一號を乞う。優詔して許さず。

■牧犍は敦煌の劉昺（続は昺）を尊して國師と為し、親ら之を拜し、官屬以下に命じて皆な北面して業を受けしむ。

●**五月**，己亥（1日），魏主は山北（武周山の北、山西省雁門道左雲県、現・大同市左雲県）に如く。

■〔林邑王の遣使〕林邑王の范陽邁は遣使して入貢し、交州を領するを求める。詔答して道遠きを以て、許さず。

■〔裴方明は程道助を捕らえる〕裴方明は進軍して涪城に向かい、張尋、唐頻を破り、程道助を擒え、嚴遐を斬り、是に於いて趙廣等は皆な奔り散る。

●〔和龍攻撃〕**六月**，魏の永昌王の健、左僕射の安原は諸軍を督して和龍を撃ち、將軍の樓季文（続は樓季、賀樓氏を樓氏と為す）は別に五千騎を將して凡城を圍む。燕の守將の封羽は凡城を以て降り、其の三千餘家を収め而して還る。辛巳（4日），魏人は秦、雍の兵一萬を發して、小城を長安城内に築く。

●**秋**，**八月**，馮崇は上表して其の父を説き降さんを請い、魏主は聽さず。

■〔甄法崇は成都へ〕**九月**，益州刺史の甄法崇^{しんほうしゅう}は成都に至り、費謙を収め、之を誅す。程道養、張尋は二千餘家を將いて逃げて鄆山（廣漢郡郫県の山、四川省嘉陵道三台県、現・綿陽市三台県）に入り、餘黨は各々衆を擁して山谷に藏竄し、時に出でて寇を為して絶たず。

●〔魏は氐王の楊難當を認知〕戊午（22日），魏主は兼大鴻臚の崔隲を遣わして節を持し、氐王の楊難當を拜して征南大將軍、開府儀同三司、秦、梁二州牧、南秦王と為す。隲は、逞之子。

■〔楊難當は漢中を取る〕楊難當は蕭思話の未だ至らず、甄法護は將に下らんとするに因りて、舉兵して梁州を襲い、白馬（沔水の北の戎、陽平關、甘肅省渭川道武都県、現・隴南市武都県）を破り、晉昌太守の張範（続は範）、

法護の參軍の魯安期等を敗る。又た葭萌^{かぼう}（甘肅省嘉陵道昭化県）を攻め、晉壽太守の范延郎を獲る。冬、十一月、丁未（12日）、法護は城を棄て洋川（陝西省漢中道西郷県、現・漢中市西郷県）之西城に奔る。難當は遂に漢中之地を有ち、其の司馬の趙溫を以て梁、秦二州刺史と為す。

●甲寅（19日）、魏主は宮に還る。

●十二月、己巳（5日）、魏は大赦す。

●辛未（7日）、魏主は陰山之北に如く。

■魏の寧朔將軍の盧玄は來聘す。

■「謝靈運の助命と、最後に棄市」前（五年に免ず）秘書監の謝靈運は、山澤之遊を為すを好み、幽を極め險を窮める。従者は數百人、木を伐り徑を開く。百姓は驚擾し、以て山賊と為す。會稽太守の孟顗は靈運と隙有り、其の異志有るを表し、兵を發して自ら防ぐ。靈運は闕を詣でて自ら陳じ、上は以て臨川内史と為す。(7-245p) 靈運は游放して自若なりて、郡事を廢棄し、有司の糾する所と為る。是の歲、司徒は遣使して州の從事の鄭望生に隨いて靈運を収めんとする。靈運は望生を執り、兵を興して逃げ逸し、作詩して曰く、

「韓は亡びて子房（秦始皇帝29年）は奮い、秦帝となりて魯連（魯仲連）は恥じる。」（靈運は世々晉臣）

追い討ちて、之を擒とす。廷尉は奏し、

「靈運は衆を帥いて反叛する、論じて斬刑を正さん。」

上は其の才を愛でて、官を免じ而して已むを欲す。袁城王の義康は堅く執り、宜しく恕すべからずを謂う。乃ち死一等を降して、廣州に徙す。之久しくして、或は告ぐ、

「靈運は人をして兵器を買い、健兒と結ば令め、三江口（廣東省粵海道番禺県、現・広州市番禺区）に於いて之を篡取すを欲し、果たさず。」

詔して廣州に於いて棄市す。靈運は才を恃んで放逸し、陵忽する所多く、故に禍に及ぶ。

●魏は徐州を外黃に立て、刁雍を以て刺史と為す。

太祖文皇帝上之下元嘉十一年（甲戌、434年）

●春、正月、戊戌（4日）、燕王は遣使して魏に和を請い、魏主は許さず。

●楊難當は漢中に克つを以て魏に捷ちを告げ、雍州の流民七千家を長安に送る。

■「蕭思話は襄陽から漢中をめざす」蕭思話は襄陽に至り、横野司馬の蕭承之（梁州に鎮す）を遣わして前驅と為す。承之は道に縁いて兵を収め、千人を得、進みて礪頭（陝西省漢中道石泉県、現・安康市石泉県）に據る。楊難當は漢中を焚掠し、衆を引いて西に還り、趙溫を留めて梁州を守らしむ。又た其の魏興太守の薛健を遣わして黄金山（陝西省漢中道洋県、現・漢中市洋県）に據らしむ。思話は陰平太守の蕭坦を遣わして鐵城戍（黄金山の戍と相對する山上と山下）を攻め、之を抜く。

■「趙溫、薛健と蕭坦の漢中の戦い」二月、趙溫、薛健と其の馮翊太守の蒲甲子（宋書蕭思話傳には蒲早子、あるいは蚤、齊書太祖紀は早、ハヤが正しいかも）は合わせて坦の營を攻め、坦は之を擊破し、溫等は退きて西水（水經註には酉）を保つ。臨川王の義慶は龍驤將軍の裴方明を遣わして三千人を將して承之を助けしめ、黄金戍を抜いて而して之に據る。溫は州城を棄て、退きて小城に據り、健、甲子は退きて下桃城（甘肅省漢中道南鄭県、現・漢中市南鄭区）を保つ。思話は繼いで至り、承之と共に趙溫等を撃ち、屢々之を破る。行參軍の王靈濟は

別に將して洋川に出、南城（南鄭の西南）を攻め、之を拔き、其の守將の**趙英**を擒にす。南城は空しくして資する所無く、**靈濟**は兵を引いて還り、**承之**と合す。

● 〔柔然の敕連可汗に西海公主〕 **魏主**は**西海公主**を以て柔然の**敕連可汗**の妻とし、又た其の妹を納めて夫人と為し、**潁川王**の**提**を遣わして往きて之を逆えしむ。丁卯（4日）、**敕連**は其の異母兄の**禿鹿傀**を遣わして妹を送らしめ、並びて馬二千匹を獻ず。**魏主**は其の妹を以て**左昭儀**と為す。**提**は、**曜**之子也。

● 辛卯（8日）、**魏主**は宮に還る。**三月**，甲寅（21日），復た河西に如く。

■ 〔蕭承之の連突槩戰法大成功、楊難當擊退〕 **楊難當**は其の子の**和**を遣わして兵と**蒲甲子**等を將いて共に**蕭承之**を撃たしめ、相い拒んで四十餘日、**承之**を數十重にも圍み、短兵は接し、弓矢は復た施す所無し。氏は悉く犀甲を衣し、**(7-246p)** 戈矛は入る能わざる所なり。**承之**は槩（矛）を斷ちて長さ數尺、大斧を以て之を椎（槌、この戦法は宋の劉裕が北魏に対して用いた戦法、卷118、417年）ち、一槩は輒ち數人を貫く。氏は當たる能わず、營を燒いて走り、大桃に據る。**閏月（元嘉曆四月）**，**承之**等は之を追撃し、南城に至り、氏は敗走し、斬獲は甚だ衆く、悉く漢中の故地を収め、戍を葭萌水（甘肅省漢中道略陽縣の川、現・漢中市）に置く。

■ 初め、**桓希**（113卷）は既に敗れ、氏王の**楊盛**は漢中に據り、梁州刺史の**范元之**、**傅歆**は皆な魏興に治し、唯だ魏興、上庸、新城の三郡を得る。**索邈**（116卷）が刺史と為るに及び、乃ち南城に治す。是に至り、南城は氏の焚く所と為り、復た固める可からず、**蕭思話**は徙りて南鄭に鎮す。（是より梁州は南鄭に治す）

● 甲戌（11日）、**赫連昌**は魏に叛して西に走る。丙子（13日）、河西の侯（斥候）將の**格**は之を殺す。魏人は其の群弟を並（続は并）せて之を誅す。

● 己卯（16日）、**魏主**は宮に還る。

▲ 〔燕王は魏の藩を称する〕 辛巳（18日）、**燕王**は尚書**高頤**を遣わして上表して藩を稱し、魏に罪を請い、季女を以て掖庭に充てんを乞う。**魏主**は乃ち之を許し、其の太子の**王仁**を征して入朝せしむ。**燕王**は魏の使者の**於什門**を送り平城に還らしむ。**什門**は燕に在ること二十一年（116卷）、節を屈せず。**魏主**は下詔して褒稱し、以て**蘇武**に比し、治書御史に拜し、羊千口、帛千匹を賜い、宗廟に策告して、天下に頒示す。

● 戊子（25日）、休屠の**金當川**（匈奴の末裔で金氏）は魏の陰密（甘肅省涇原道靈臺縣、現・平涼市靈台縣）を圍む。**夏，四月（元嘉曆五月）**，乙未（3日）、魏の西大將軍の常山の**王素**を徵して之を撃つ。丁未（15日）、**魏主**は行きて河西に如く。壬戌（30日）、**當川**を獲り、之を斬る。

■ 〔楊難當は謝罪〕 **甄法護**は鎮を委て^するに坐して、獄に於いて死を賜わる。**楊難當**は遣使して奉表して謝罪し、帝は下詔して之を赦す。

■ 〔河西王の牧犍の魏宋両面外交〕 河西王の**牧犍**は遣使して上表し、位を嗣ぐを告げる。**(元嘉曆六月)** 戊寅（16日）、詔して**牧犍**を以て都督涼、秦等四州諸軍事、征西大將軍、涼州刺史、河西王と為す。

● **六月（元嘉曆七月）**，甲辰（13日）、**魏主**は宮に還る。

▲ 〔燕王は太子の質を送らず、決裂〕 **燕王**は太子の質を魏に遣わさず、散騎常侍の**劉滋**は諫めて曰く、「昔**劉禪**は重山之險有り、**孫皓**は長江之阻む有り、皆な晉の擒と為る。何の則ちすや？強弱之勢いは異なれば也。今吾は吳、蜀より弱く而して魏は晉より強く、其の欲するに従わざれば、將に危亡之禍有り。願わくは^{すみやか}に太子を遣わし、而して政事を修め、百姓を撫で、離散を収め、饑窮を賑わせ、農桑を勧め、賦役を省かん、社稷は猶ほ^{こいねが}庶幾わくは保つ可し。」

燕王は怒り、之を殺し、辛亥（20日）、魏主は撫軍大將軍の永昌王の健等を遣わして燕を伐ち、其の禾の稼ぎを収め、(7-247p) 民を徙して而して還る。

● 「魏主は山胡の白龍の伏兵に遭う」 秋，七月（七月閏月），壬午（21日），魏主は美稷（山西省河東道汾陽県、現・呂梁市汾陽市）に如き、遂に隰城（現・呂梁市汾陽市）に至り、陽平王の它に命じて諸軍を督して山胡（稽胡、匈奴の別種）の白龍を西河に撃つ。它是、熙之子也。魏主は山胡を輕んじ、日に數十騎を引いて山に登りて之を臨み視る。白龍は壯士を十餘處に伏せて之を掩撃し、魏主は馬から墜ち、幾んど擒と為る所となる。内和行長（魏の官、勇力の選抜の士、禁中当直、その部帥）の代人の陳建は身を以て之を扞ぎ、大呼して奮撃し、胡數人を殺し、身は十餘瘡を被り、魏主は乃ち免れる。

● 九月，戊子（28日），胡の衆を大破し、白龍を斬り、其の城を屠す。冬，十月，甲午（5日），魏人は白龍の餘黨を五原に破り、誅すること數千人、其の妻子を以て將士に賜る。

● 十一月，魏主は還宮に還る。十二月，甲辰（16日），復た雲中に如く。

太祖文皇帝上之下元嘉十二年（乙亥，435年）

■ 春，正月，己未（1日）朔，日に食之れ有り。

■ 辛酉（3日），大赦す。

■ 辛未（13日），上は南郊に祀す。

▲ 「燕王は宋の冊封を受ける」 燕王は數々魏の攻める所と為り、遣使して建康に詣り藩を稱し貢を奉る。癸酉（15日），詔して封じて燕王と為し、江南は之を黃龍國と謂う。

● 甲申（26日），魏は大赦し、改元して太延とす。

■ 「敦煌の老人の予言」 老父有り敦煌の東門に投書す、之を求めて、獲らず。書して曰く、「涼王三十年、若しくは七年。」

河西王の牧犍は以て奉常の張慎に問い、對えて曰く、

「昔虢（^{かく}虢國、虎の爪痕）之將亡は、神は莘（^{しん}細長い、莘國）に降る。願はくは殿下（^{たつと}続は陛下）は德を崇び政を修めれば、以て三十年之祚を享けるべし。若し游田に盤（^{たのし}み、酒色に荒れれば、臣は七年にして將に大變有るを恐れる。」

牧犍は悦ばず。

● 二月，丁未（20日），魏主は宮に還る。

▲ 三月，癸亥（6日），燕王は大將の湯燭を遣わして魏に入貢し、辭して、「太子の王仁に疾有りを以て、故に未だ之遣わさず。」

■ 「劉湛は殷景仁を追い落とし」 領軍將軍の劉湛と僕射の殷景仁は素より善し、湛之の入る也、景仁は實に之を引く（前の八年にあり）。湛は既に至り、景仁の位遇は本己に逾えざるに、而して一旦前に居るを以て、意は甚だ憤憤とす。俱に時遇せ被れるや、景仁が専（^{もつぱ}）ら内任に管するを以て、己を間（^{おも}）すと謂（^{さいげき}）為い、猜隙（^{やうや}疑い隙間）は漸く生ず。帝の景仁を信仗するに、移奪する可からずを知り、時に司徒の義康は専ら朝權（^と）を秉り、湛は嘗て義康の上佐（^た）為り（119 卷武帝永初元年に見える）、遂に心を委ねて自ら結び、宰相之力に因りて以て上の意を回（^{めぐ}）らし、景仁を傾黜し、獨り時務（^{あた}）に當らんと欲す。

■ 「景仁は家を府とする」 夏，四月，己巳（43日？），帝は景仁に中書令、中護軍を加え、(7-248p) 即

ち家を府と為さしむ。湛には太子の詹事を加える。湛は愈々憤怒し、義康をして帝に景仁を毀ら使む。帝は之を遇するに益々隆し。景仁は親舊に對して歎じて曰く、

「之を引いて入ら令め、入れば便ち人を噬（噛）む！」

乃ち疾と稱して職を解かんとし、表疏を累に上る。帝は許さず、家に停まりて病を養わ使む。

■ 湛は景仁を外で殺さんとす 湛は人を遣わして劫盜（強盜）の者の若く外に於いて之を殺さしめんを議し、以て為す、

「帝が知ると雖も、當に以て之を解く有るべし、義康の至親之愛を傷つける能わず。」

帝は微かに之を聞き、護軍府を西掖門外に遷して、宮禁に近づけ使め、故に湛の謀は行われず。

■ 庾炳之は二人之間に遊ぶ 義康の僚屬及び諸々の湛に附麗する者は、潜かに相い約して勒し、敢えて殷氏之門を歴る無し。彭城王の主簿の沛郡の劉敬文の父の成は、未だ其の機を悟らず、景仁に詣りて郡を求める。敬文は遽に往きて湛に謝して曰く、

「老父は悖毫して、遂に殷鐵（鐵は景仁の字）に就きて干祿（仕官を求める）す。敬文の暗淺にして、上生成に負くに由り、閹門（一族）は慚懼し、地の自ら處する無し。」

唯だ後將軍の司馬の庾炳之は二人之間に遊び、皆な其の歡心を得、而して密かに忠を朝廷に輸す。景仁は家に臥して朝謁せず、帝は常に炳之をして命を銜んで往來せ使め、湛は疑わざる也。炳之は、登之之弟也。

■ 燕王は宋に援軍を求める 燕王は右衛將軍の孫德を遣わして來たりて師を乞う。

● 魏の重臣眷属の登用 五月，庚申（4日），魏主は宜都公の穆壽を進めて爵を王と為し、汝陰公の長孫道生を上黨王と為し、宜城公の奚斤を恆農王と為し、廣陵公の樓伏連は廣陵王と為す。壽に征東大將軍を加える。壽は辭して曰く、

「臣の祖父の崇は前朝に功を効し、福を後に流すを得し所以の者は、梁眷之忠（106卷）に由る也。今眷の元勳は未だ録せられず、而して臣は獨り奔世、賞を受けるは、心は實に之を愧ず。」

魏主は悦び、眷の後を求め、其の孫を得て、郡公に賜爵す。壽は、觀（穆觀は119卷武帝永初三年にあり）之子也

● 柔然妨害で西域通行できず 龜茲、疏勒、烏孫、悅般（烏孫の西北）、渴槃陀（葉爾羌、ヤルカンド）、鄯善、焉耆、車師、粟特（粟特、ソグディアナ）の九國は魏に入貢す。魏主は以えらく漢の世は西域に通じると雖も、求め有れば則ち辭を卑くして而して來り、求め無ければ則ち驕慢にして服せず。蓋し自ら中國を去ること絶遠にして、大兵は至る能わざるを知る故也。今報使は往來すれば、徒らに勞費を為し、終に益する所無く、遣使せざるを欲す。有司は固く請う、以て為す、

「九國は險遠を憚らず、義を慕いて入貢す、宜しく拒絕して、以て將來を迎えるべからず。」

乃ち使者の王恩生等二十輩を遣わして西域に使いせしむ。恩生等は始めて流沙を度り、柔然の執る所と為り、恩生は敕連可汗を見、魏の節を持ちて屈せず。魏主は之を聞き、敕連を切責し、敕連は乃ち恩生等を遣わして還らしむ。竟に西域に達する能わず。（7-249p）

● 甲戌（18日），魏主は雲中に如く。

● 魏は繁榮を謳歌 六月，甲午（9日），魏主は時に和して年豊かに、嘉瑞の沓に臻（至）るを以て、詔して大酺（国の慶事に天子の酒食宴会）は五日、遍く百神を祭り、用つて天貺（天のたまもの）に答える。

【高句麗の魏入貢、北燕の接近】

● 高句麗王の璉の入貢 丙午（21日），高句麗王の璉（長寿王）は遣使して魏に入貢し、且つ國の諱を請う。魏主は帝系及び諱を録して以て之に與え使む。璉を都督遼海諸軍事、征東將軍、遼東郡公、高句麗

王に拜す。璉は、釗（97 卷成帝咸康八年に見える、前燕に降される）之曾孫也。

● **「魏の燕への出兵」** 戊申（23日）、**魏主**は驃騎大將軍の樂平王の**丕**、鎮東大將軍の徒河の**屈垣**等に命じて騎四萬を帥いて燕を伐たしむ。

■ **「揚州大水害と、酒の禁止」** 揚州の諸郡は大水あり、己酉（24日）、徐、豫、南兗の穀を運んで以て之を賑わす。揚州の西曹主簿の**沈亮**は建議し、以て為す

「酒は穀を^{ついや}糜して而も饑えを療するには足らず、^{かり}權に禁止するを請う」
詔して之に従う。**亮**は、**林子**之子也。

● **秋，七月**，**魏主**は秭陽（漢の五原の北辺、オルドスの北辺）に敗す。

● **「魏は燕和龍に到達、略奪」** 己卯（23日）、魏の樂平王の**丕**等は和龍に至る。**燕王**は牛酒を以て軍を犒^{ねぎら}い、甲三千を獻ず。**屈垣**は其の侍子を送らざるを責めて、男女六千口を掠して而して還る。

● **八月**，丙戌（31日？）、**魏主**は河西に如く。**九月**，甲戌（20日）、宮に還る。

● **「魏の安原の誅殺」** 魏の左僕射の河間公の**安原**（429年に亡くなった安同の子、侍中・尚書左僕射・征南大將軍・河間公）は、寵を恃んで驕恣す。或は、

「**原**は逆を為さんと謀る」

を告げ、**冬，十月**，癸卯（19日）、**原**は坐して族誅せらる。

● 甲辰（20日）、**魏主**は定州に如く。**十一月**，乙丑（12日）、冀州に如く。己巳（16日）、廣州に敗す。丙子（23日）、鄴に如く。

● **「燕王は高句麗に頼る方針を出す」** 魏人は數々燕を伐ち、燕は日々に危蹙し、上下は憂懼す。太常の**楊[日昏]**は復た**燕王**に勧める、

「速かに太子を遣わして入侍せしめるべし。」

燕王は曰く、

「吾は未だ此を為すを忍びず。若し事急なれば、且^{しばら}く東の高麗に依りて以て後舉を圖らん。」

[日昏]は曰く、

「魏は天下を擧げて以て一隅を撃つ、理は克たざる無し。高麗は信無く、始めは相い親しと雖も、終に變を為さんを恐れる。」

燕王は聽かず、密かに尚書の**陽伊**を遣わして高麗に迎えを請う。

■ **「仏教の諸問題」** 丹陽尹の**蕭摹之**は上言す、

「佛化は中國を被い、已に四代（漢魏晋宋）を歴て、形像塔寺は、在る所千數なり。^{このころ}頃より以來、情敬は浮末（浮薄）にして、精誠を以て至と為さず、更に奢を競うを重しと為し、材竹銅彩の、糜損するは極まり無し。神祇に關わる無く、人事に累^{わずら}い有り、之が防を為さざれば、流れて遁れること未だ息まず。今より銅像を鑄し及び塔寺を造らんと欲する者は、皆な當に列言して、報を須^{つぐ}ち乃ち之を為るを得んを請う。」
詔して之に従う。**摹之**は、**思話**の從叔也。（7-250p）

● 魏の秦州刺史の**薛謹**は吐沒骨を撃ち、之を滅す。

■ **楊難當**は**楊保宗**之囚われるを釋し、**童亭**（後魏書には董亭、甘肅省蘭山道隴西県、現・定西市隴西県）に鎮ぜ使む。

令和2年2月21日	翻訳開始	11428 文字
令和2年2月27日	翻訳終了	19119 文字
令和2年9月2日	完訳終了	22436 文字
令和3年7月26日	書下し終了	22603 文字